

第 29 回全国小学生作文コンクール

「わたしたちのまちのおまわりさん」

受賞名：優秀賞（高学年の部）

タイトル：なくてはならない存在

氏名：沼端 里采（ヌマハタ リコ）

小学校名：青森県 八戸市立三条小学校 五年

「どうしても行かなければいけないの。」

幼稚園のころの私は、父の仕事を理解していなかった。家族で出かけるときに仕事に行かなければならなくなり、出かけることができなくなったことが何度かあった。それでもいつも母は「行ってらっしゃい。」と送り出していた。

父は警察官だ。休みの日でも、いつ呼ばれるか分からない。八戸市内で中学生が小学校六年生の女の子の首をカッターナイフで切りつけた事件のときにも、急に連絡が入ってよばれて行った。それから二、三日帰って来なかった。犯人が中学生とはいえ、人をきずつけるおそろしい行動をとる人だから、父も同じように切られたらどうしようと心配だった。当直きんむで父のいない食たくは今までもあったのに、分からないけれど不安な気持ちかもやもやとわき上がっていた。家族全員で食事をしているときに比べると、笑顔はあまりなかった。年長の妹が、

「パパ、大じょうぶかなあ。」

と、小声でつぶやいた。すると母が、

「たぶん…大じょうぶだよ。」

と元気づけた。絶対大じょうぶだとは言えないけれど、それなりにはやれると思っている。妹と遊んだりテレビを観たりしているときには忘れていたのに、夜ねるときに布団に入ると、父のことが思い出される。体の中で、もやもや感が広がる。眠れない。それでも、いつの間にかねてしまっている。そのくり返した。帰って来た父を見て、あまり休んでいない顔に見えた反面、解決してうれしい顔にも見えた。

ある日、父は顔や体中すりきずだらけで帰ってきたことがあった。職む質問をしたとき、逃げようとした車にしがみついて引きずられたそう。包帯をまいている父を初めて見て、訓練をしても何があるか分からないのだと思った。改めて父の仕事は危険ととなり合わせだと実感した。

父に聞いてみた。

「パパは、どうして警察官になったの。」

「中学生のときに万引きをしている人を見たことがあって、悪いことをする少年を増やしたくなかったからだよ。警察官になってから万引きをした中学生に『もう悪いことはしません』と書いた手紙をもらったんだよ。」

と、父の声はいつも以上に高くはずんでいた。

父は、警察官として常に気をつけていることは、国民が安心して生活できるように最大限に力をつくすことと言っている。近所の街灯に雷が落ちてくだけ散ったガラスの破片に気がついた父は、犬の散歩から帰るとすぐに片付けに行った。みんなの安全なくらしを考えている父は、口先だけではなく行動に移している。

世の中のために体を張っている父の姿を見るたびに、私の心に正義が生まれてくる。多くの警察官のおかげで私たちは、安心・安全にくらせる。なくてはならない存在だ。